



笠松の偉人

◆◆ シリーズ⑦ ◆◆

日本中を沸かせた芦毛の怪物 オグリキャップ

何事も自分で直接経験してみようとの意味に、「馬には乗ってみよ人には添うてみよ」のことわざがあります。今回は、笠松を一躍有名にした“馬”を紹介します。

昭和60年に誕生し、昭和62年笠松競馬場に入厩「オグリキャップ」と命名されました。その年5月のデビュー戦こそ2着でしたが12戦10勝の成績を残し、翌年1月に中央競馬(JRA)に移籍しました。

中央競馬移籍後6連勝で臨んだ天皇賞で2着に敗れたものの、年末の有馬記念で優勝。平成2年、「奇跡の復活」「感動のラストラン」と呼ばれた有馬記念でも見事優勝。スタンドには「オグリ、オグリ…」の歓声が鳴り響きました。

生涯成績32戦22勝(うちGIレース4勝)を挙げ引退。

笠松競馬場には功績を讃えたブロンズ像が建てられ、平成22年に亡くなると像の台座に「たてが

み展示記念碑」が設置されました。毎年4月には「オグリキャップ記念」レースも開催されています。

激動の時代・昭和の終わりに現れ、地方競馬で身を起こし実力一本でスターダムにのし上がった“芦毛の怪物”は第2次競馬ブームを巻き起こし、日本の競馬を新たな時代へと導きました。オグリキャップの成績を上回る馬はこれからも多く出てくるでしょうが、オグリキャップのように、たくさんの人の“心”を揺さぶる馬は出てくることはないかもしれません。



「オグリキャップ里帰りセレモニー」での雄姿
平成17年(2005)4月

かきまつの民話「昔むかし」

まといの松太郎 ③

綿屋佐蔵の東側の炊事場あたりは火の手があがって、手がつけられなかった。

松太郎は梅の姿をこったがえす人の向こうに垣間見たが、秋井組の若い奴ら四人程で支えるはしごを、つつと登り、はしごからとなりの小屋根にくるりと宙を飛んだ。こわさで震える梅にも、小屋根から佐蔵の大屋根にとびこえていく松太郎の姿が影絵のように見えた。そして、そのむこうの火の粉が吹きあがるあたりの瓦をこわしている源太も見えた。

「どうぞ、火事をこの家一軒にとどめてください。」と梅は願った。

西風で火の粉が東へ舞うその境目にたって、「ここだ、ここをめぐって、水をうて。」と白い大きなまといを回した。

しぼんだり、開いたりするまといのむこう

で源太が松太郎に言ったが、「もお、水では消せないなあ。この家を倒すより仕方がないぞ。」

「源太。この風だ。東の林兵衛の家に燃え移ったら、高島屋の火事どころでなくなるぞ。大きな家だ。南の庭へ倒せるといいのだが。」

「もつと、火の近くでまといを振らないといかん。」

と自分に言い聞かせるように、松太郎は熱い火照りの方へ少しづつ足をかえた。めらめらと崩れおちる屋根瓦の炎は、たしか少年のあの日の火事と同じだった。

つづく

